

# 英語の比較構文の考察

津 田 早 苗

A Study of English Comparatives

Sanae Tsuda

## 序 論

英語の比較構文に関して、従来から様々な角度からの研究がなされてきた。形態論に関しては、形容詞及び副詞の比較級、最上級が屈折比較と呼ばれる *-er*, *-est* の語尾変化によるか、*more*, *most* をつけ加える迂言変化によるかの検討は、George O. Curme や、Otto Jespersen 等によって詳細になされてきた。又、意味論の上からはどのような意味的特性を持つ形容詞、副詞が比較変化の対象になるかは、伝統文法家及びその後の文法家達によって検討されてきた。<sup>1</sup> 特に、統語論上の研究は、従来の研究に加えて、近年変形文法家達によって多くの提案がなされたといえる。この小論では比較構文を統語論の観点から観察する。

第1章では、比較構文の補文の性質を初期の変形文法家がどのようにとらえ、そして、現在どのように考えているかを概観し、実際の英文と比較し、その性質を明らかにする。第2章では、比較構文において、主文と補文との間にどのような関係・制限があるのかを観察し、比較構文の持つ特徴・問題点を指摘する。

## 第1章 比較構文の補文の性質

我々の手にする辞書の品詞分類によると、比較構文における *than*, *as* 等は接続詞であると分類されている。それは、

(1) John is taller than Mary.

という文が、

(2) John is taller than Mary is.

という文と深い関連を持っていると考えられることから、(1) の *than* も (2) の *than* が従属節を導く接続詞であることから、前置詞とは考えないという見地から来ていると言える。

変形文法においても、*than*, *as* のあとに節が来ることから、比較構文は、ある種の補文構造であるという点で一致した考えが見られる。しかし、その補文がどのような性質を持つかという点に関しては、様々な分析が見られる。

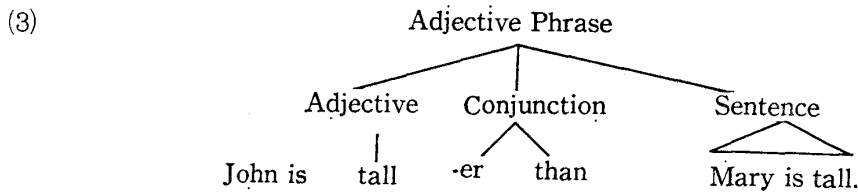
初期の変形文法家の中では Hale (1970) の指摘するように、大別して二つの考え方が、

1. たとえば、*gradability* に関する論文 Gnutzmann (1975), 安井, 秋山, 中村 (1976) における比較構文の意味構造の記述などがあげられる。

Smith (1961) と Lees (1961) によって示された。

Smith は、従来の考えと一致して、比較級語尾を含む **than** を接続詞ととっている。

例文 (1) 又は (2) の形容詞句の部分の分析は、Smith によれば次のようになる。



この分析は、**than** が従位接続詞で、文全体として複文であるという構造をよく示しているといえる。しかし、Hale の指摘するように、**-er than** を接続詞と考えると、比較構文の持つ統語的多様性を、一つの構造にはめてしまう危険性があるといえる。比較は、形容詞句内のみ見られるのではなく名詞句内、副詞句内にも見られる現象であることは次の例からもわかる。

(4) Mary has [more friends than two.] *NP*

(5) John runs [faster than Mary.] *AdvP*

よって、比較構文の構造は、このような、比較の持つ多様性をとらえられるものではなくてはならないと言える。又、名詞、形容詞、副詞の比較という多面性だけではなく、原級比較、比較級比較、最上級比較を系統的にとらえる統語構造が、その各々に全く別の構造を付すものよりすぐれているといえる。

Smith の提案に対し、Lees (1961) は、**than** の持つ意味的、統語的特徴を次のような文の **that** と比較している。

(6) He is as tall as that. (彼はそんなにも背が高い)

の場合のような **that** は、例文 (1) と (2) との間にあるような対応は成り立たず。

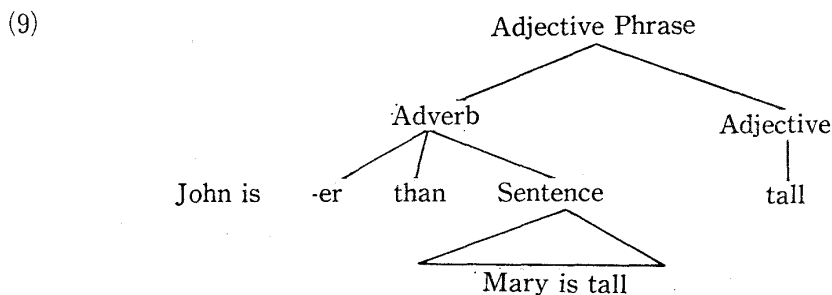
(7) He is as tall as that is.

の **that** は代名詞であり(6)のような意味においての **that** は

(8) He is that tall. (彼はそのくらい背が高い)

の **that** と深く関連づけられるので、比較構文を導入する要素は、この **that** のように何か程度・度合をあらわす副詞のようなものではないかと考え、副詞としている。

Lees によれば、(1) 又は (2) の形容詞句の部分の分析は次のようになる。



この統語構造によって示されているのは、「John は背が高い」という主文に、「Mary の背を高さよりも」という従属節が導入されているという Smith の構造にくらべると意味を中心に考えた構造である。Lees のこの考えは、その後の変形文法家に受け継がれて行くが、これらの文法家達にとって、as や than の品詞名が何であるかより全体として比較構文がどのような構造になっているかが問題であるといえる。

Lees の提案が、Smith と異っているのは、単に品詞名だけでなく、比較構文とは、程度、度合をあらわす副詞的補文を持った文であるという点にあるといえる。Lees のこの提案はその後の理論の発展に大きな貢献をしている。

Lees の比較構文の補文が、程度、度合をあらわす副詞的性質を持つという提案は Hale (1970) によって更に明確にされた。彼は比較には、文法でいう quantifier (数量詞) が関係していると提案している。ここでいう数量詞とは、many, much, few, little であり、これらは通常は名詞と共起して数、量を示すが、これらが、形容詞・副詞と共起するのは、比較においてのみであると指摘している。

(10) The book was more expensive.

(11) He drove more recklessly.<sup>1</sup>

Hale と同様な提案を Bresnan (1974) は、より体系的に行っている。彼女は数量詞の many, much, few, little が as, too, that, so と共起するのに、これらの数量詞の比較級は、as, too, that, so とは共起しない事実に注目した。そして、これらの

(12) as	much bread	as	little bread
too	much bread	too	little bread
that	much bread	that	little bread
so	much bread	so	little bread
-er	much bread [ $<$ more]	-er	little bread [ $>$ less]

(13) as	many people	as	few people
too	many people	too	few people
that	many people	that	few people
so	many people	so	few people
-er	many people [ $>$ more]	-er	few people [ $>$ fewer] <sup>1</sup>

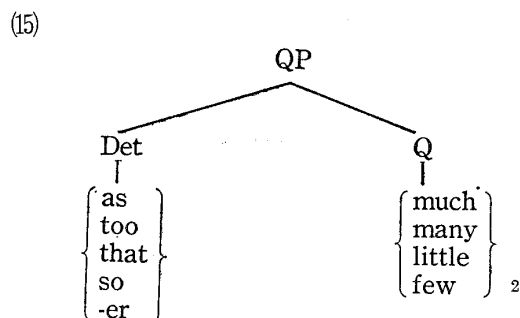
数量詞と as, too, that 等を上のような表に示し、比較級が as, too, that 等と共起しないのは、比較をあらわす要素が丁度、as, too, that と同じ要素にあたるからであるという提案をしている。このような提案をするのには、勿論、次のような規則が必要である。

1. Hale (1970) p. 33.

1. Bresnan (1974), p. 277.

- (14) -er much → more  
 -er many → more  
 -er little → less<sup>1</sup>

彼女は、更にこれらの典型的な名詞を修飾する数量詞 **many, much, few, little** の用法から論を進めて、形容詞、副詞に関する比較構文にも同様な分析が出来ると提案し、仮に、それを、QP (Quantifier Phrase) と呼び、構造を次のように提案している。



以上のような規則と構造<sup>2</sup>を提案することによって Bresnan は、Lees の述べた比較構文の補文の持つ程度、度合という副詞的性質を、この QP の分析によって具体的に示したといえる。

たとえば、上の規則によって、*as little bread* は可能だが、非文法的な、*\*as more bread* は排除されることが説明される。しかし、この規則によると、同等比較の *as tall* が必要な時も Q の *much* が導入され *\*as much tall* が生成されるので形容詞の前に *as much* が来ると消去される規則が必要だとされている。それによって、

- (16) \*as much tall → as tall  
 I drank as much milk → \*I drank as milk  
 I ate as much → \*I ate as<sup>3</sup>

のように *much* の消去が適切に行なわれる。Bresnan の提案と、Hale の提案を更に詳しく比較して見ると最も大きな相違は、最上級の扱いにあるように思われる。Bresnan が、仮の分類としているが、冠詞に含んでいる、*as, too, that, so, -er* は、Hale の分類によると、*comparative elements* と呼ばれ、それに含まれるのは、*-er, as, too, so, the—est* である。この *comparative elements* がどのような性質を持つかは、Hale においては、規則としては述べられていないが Bresnan の提案と同様に、数量詞と共に、比較の補文を導入すると提案されている。Hale が *comparative elements* に含んでいる *the—est* を Bresnan

1. Bresnan (1974), p. 277.  
 2. Bresnan (1974), p. 277.  
 3. Bresnan (1974), p. 278.

は、Det の中に含んでいないが、これは、Det の中に the と共起する est を提案することは矛盾しているからであると考えられる。最上級の比較構文をどのように生成するのかを、Bresnan は具体的には提案していないが、最上級には、定冠詞をとるものと、不定冠詞をとるものがあり、そのどちらかであるかによって屈折変化の最上級をとるか、迂言変化によるかが異なるということを指摘している。

- (17) a. a most kind answer  
 b. \*the most kind answer  
 c. \*a most kind answer that I ever heard  
 d. \*a kindest answer  
 e. the kindest answer  
 f. the kindest answer that I ever heard<sup>1</sup>

Bresnan の論文において、比較構文の最上級の構文も、as, more, too 等を含む他の比較構文と同様に生成されることは示唆されているが、最上級に関する明白な提案はなされていない。最上級に関しては、数量詞の問題のみならず、文のどの段階で冠詞が決定されるかという議論がなされなければならない今後解決されなければならない問題であるといえる。

最上級に関する細部の分析は Hale によってもなされてはいない。

部分的にはあるが、以上において、比較構文の補文の性質を概観した。それによって比較構文の持つ統語的多様性が、数量詞を含む句が名詞、形容詞、副詞等を修飾する構造によって明らかになり、又、数量詞を修飾する as, that, -er 等によって同等比較・比較級比較等の持つ関連がより明確に示された。最上級の構造の記述は今後の課題である。次章では補文と主文との関連について述べる。

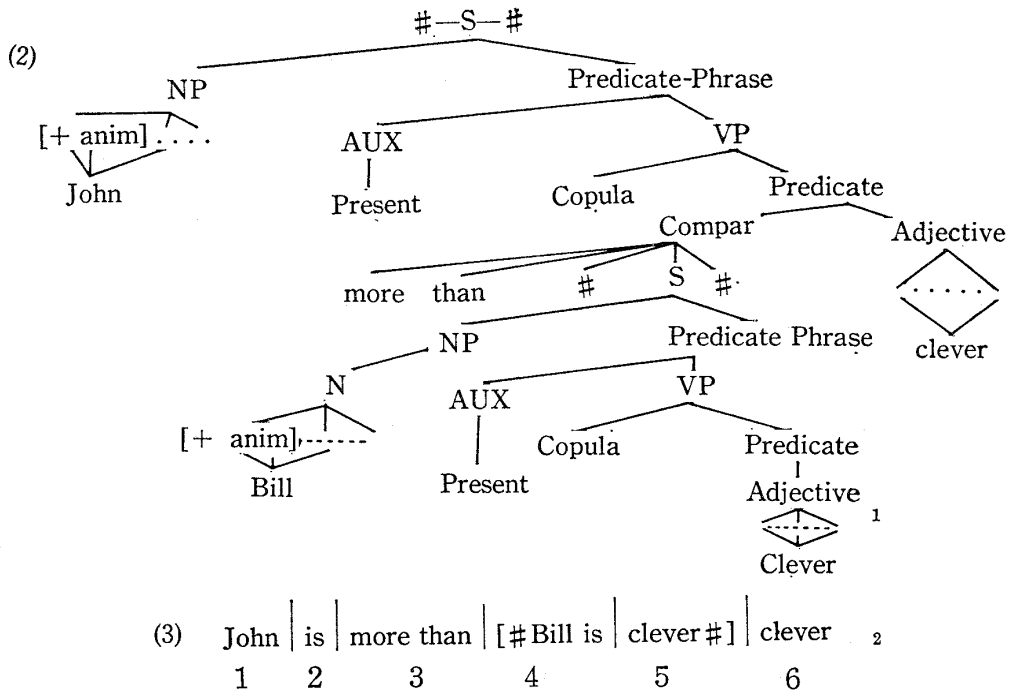
## 第2章 主文と補文との関連

主文と補文との関連と、そこに生ずる問題点に関して、統語素性の面から指摘したのは Chomsky (1965) である。Chomsky も Lees と同様な深層構造を設定しているが、Lees の用いた副詞という品詞名のかわりに比較をあらわす compar という名前を用いている。例文を用いて Chomsky の比較構文の構造を概観する。

- (1) John is more clever than Bill.

例文 (1) の統語素性も含む深層構造は、おおよそ次のようなものであるとされている。

1. Bresnan (1974), p. 312.



深層構造 (2) の主文の **clever** と、補文の **clever** が同一なので、変形規則によって (3) に示した第5項は消されて例文 (1) が生成されるのであるが、Chomsky は、どのような条件があれば消去がおこるかを分析している、単に同じ形容詞であれば消去するとすると、比較構文として適当でない文も生成されるのでどのような条件を課せば良いのかという問題をいくつか考慮している。

(2) の句構造標識のような場合は、5項の **clever** の素性と6項の素性とが、選択制限の素性まで一致しているが、更に Chomsky はどのような性質を持った素性が一致しなければならないかを他の例を使って示している。その一つは、変形によって導入される単数・複数を区別する素性である。

(4) I know several more successful lawyers than Bill. <sup>3</sup>

例文 (4) においてその深層構造は **Bill is a lawyer.** という句構造を持っている筈であるが、表層において、その同一消去は、複数形 **lawyers** との間におこっているわけしあり、このように単数・複数のような変形によって導入される素性は消去変形の際には、影響しないのではないかと提案している。

1. Chomsky (1965), pp. 182-183.

2. Chomsky (1965), p.180.

3. Chomsky(1965), pp.182-183.

又、次に述べる Hale の研究に継承されていく問題であるが、Chomsky は次のような素性の問題を指摘している。

(5) John is heavier than the rock.

(6)\* John is as sad as the book he read yesterday.<sup>1</sup>

例文 (5) の深層構造において、主文の heavy は、John という [+animate] な主語を持ち補文の heavy は rock という [-animate] な主語を持っているので形容詞の各々は、主語の選択制限に関して異った素性を持っているが、heavy を消去した文 (5) は文法的であるそれに対し、(6) の例文における形容詞 sad についても主文で [+animate] な主語を持っているのに対し、補文で [-animate] な主語を持っているということがいえるのに、sad を消去した(6)は、非文である。(5)、(6) の問題に関し、Chomsky は明確な答は出していない。以上に指摘したようななどのような文が比較構文として文法的となるかは、Hale (1970)、Bresnan (1974) によって更に分析されている。

Hale (1970) においては、比較構文の内特に比較級の構文における主文と補文の関連が論じられている。第1章で比較構文の補文を導入するのは、数量詞を含む副詞のようなものであるという彼の提案を述べたが、Hale は、更に、この数量詞が主文と補文において同一であることを主文と補文がつながる第一の条件にあげている。たとえば、次のような非文は Hale によれば数量詞が異っているので排除されるのである。

(7) \*More came than we accomplished.

a. -er many came

b. We accomplished than much<sup>2</sup>

例文 (7) において本文の数量詞は many であるのに、補文では much であるので比較構文は成立しない。彼の提案と同様の提案は Bresnan (1974) にも見られるが、従来は、直観によって非文とわかっていても理論的に説明出来るようになった点で評価できると言える。

しかし、数量詞の一致だけでは、主文と補文がつながる条件をすべて述べるには十分ではない。Hale が数量詞の一致と共にあげている条件は、主文と補文の構文上の一致ということである。どの程度文法的な構造が一致していなければいけないかは、更に検討する必要があるが、Chomsky の例文 (5) と (6) の文の問題に対して一つの解答を与えていると思われる。例文(5)の主文と補文は同じ文法的構造を持っているが例文 (6) の補文は、関係詞節構造を持っているが主文は持っていない。ある文法の制限をどの程度一般的な規則であるかを考えるには、比較構文の構造のみを分析のみでは不可能なのでここでは、Hale の述べている分析をとりあげ

1. Chomsky (1965), pp.183-184.

2. Hale (1970), p.35.

る。Hale は、Huddleston (1967) にならって比較構文の類型を大別して6つに分類しているが、少なくとも、主文に補文は、その文型内で一致しなければいけないと提案している Hale の分類は次のようなものである。

A. Determiner position

1. Noun head present: Mary bought more records than Peter.
2. Noun head deleted: Mary achieved more than Peter.

B. Adjective position

1. In the predicate: Mary is more talkative than Peter.
2. In a noun phrase: Mary bought a more expensive car than Peter.

C. Adverb position

1. With an adverb: Mary talks more quickly than Peter.
2. With a verb: Mary talks more than Peter. <sup>1</sup>

Hale は、更に先に Chomsky がとりあげたような語い素性と主文と補文との関連を分析したている。

- (8) \*The committee meeting was longer than the table. <sup>2</sup>

がなぜ非文であるかを説明するのにその深層構造の主文 a. と補文 b. を観察する。

- a. The committee meeting was -er much long.
- b. The table was much long.

今まで述べてきた Hale の主文と補文のつながる条件である数量詞の一致、構造上の一致という条件を満たしているが、long を消去した結果できる文 (8) は非文である。この問題を解決するのに、Hale は、語い素性の違いをあげ、(8a) の long は [+time] という素性を持っているのに対し (8b) の long は [+dimention] という素性を持っているので同一消去が起こらないと説明している。

Hale は、更に語い素性の記述を進めて行くが彼の理論の特徴となっているのは、unit の考えである。時間・距離・長さはいずれも単位と関連する表現であるが long-short, narrow-wide, early-late 等対立する形容詞副詞は、その中でどちらかがその単位を代表していると考えられる。たとえば同じ素性を持っていても、unit という点で違うと。

- (9) The table is six feet long.                    は、文法的であるが  
 (10)\* The table is six feet short.                は、非文であり、

1. Hale (1970), p. 35.  
 2. Hale (1470), p. 38.



- (11) The table is three feet wide. は, 良いが,  
 (12)\* The table is three feet narrow. は, 非文である。

というような現象が見られる。このように, その単位を代表するものには [+unit] そうでないものには, [-unit] という素性を与えると,

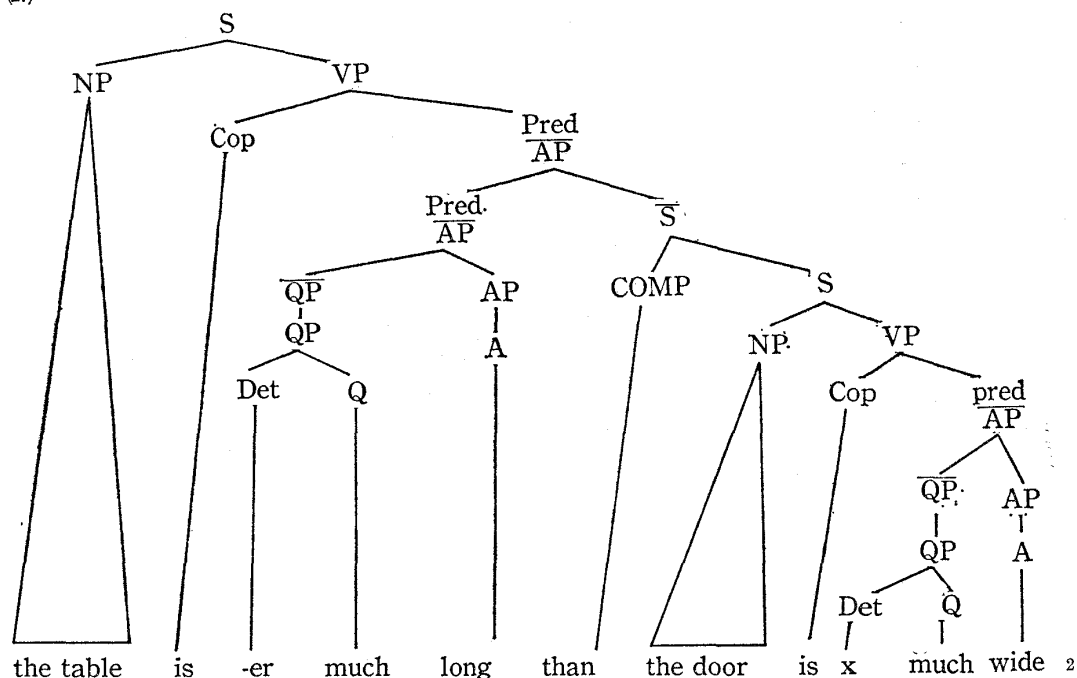
- (13) The table is longer than it is wide. の文法性と  
 (14)\* The table is longer than it is short.  
 (15)\* The table is shorter than it is narrow. の非文であることが説明される。

以上が Hale の提案の概容である。

Bresnan は, 第一章で述べたような補文を, head と呼んでいるが, 更に head が主文すなわち彼女の言う clause とどのような関係を持っているかを述べている。Bresnan は, so, as, the, too 等を補文を導入する役割という点から, complementizer (補文導入標識) と呼んでいる。Hale の提案と同様に彼女も 主文と補文の数量詞が一致することが同一消去の原則であるとしているが, 補文の QP の Det は指定されず X のままである。次のような例文に対して Bresnan は以下のような構造を与えている。

- (16) The table is longer than the door is wide. <sup>1</sup>

(17)



上の構造において補文の QP は消去され (16) の文が生成される。上のような構造を述べた

1. Bresnan (1974), p. 322.

2. Bresnan (1974), p. 322.

のみでは、Hale が語い素性によって非文を排除しようとした点が統語構造によって説明され  
るとしている Bresnan の論点は明確にはされない。Bresnan の扱っている例文は、Hale と  
同一ではないので同一の基準で比較し難いが、Hale が素性によって解決しようとした点を、  
Bresnan は、統語構造の面から消去が可能な組とそうでない組とを記述しているといえる。

たとえば、彼女は、(17) (18) のような例文を示している。

- (17) a. John is more than six feet tall.  
b. \*John is more than Bill tall.  
c. John is taller than six feet.  
(Also: taller than six feet tall.)  
d. John is taller than Bill.
- (18) a. Mary has more than two friends.  
b. \*Mary has more than just Bill and Pete friends.  
c. Mary has more friends than two.  
d. Mary has more friends than just Bill and Pete.

上の例文の補文と主文の消去に関係のある部分の構造は (19) (20) である。

- |         |                                       |                    |
|---------|---------------------------------------|--------------------|
| (19) a. | six feet=that much                    | QP=QP              |
| b.      | *Bill=that much                       | *NP=QP             |
| c.      | six feet (tall)=that (much) tall      | AP=AP or QP=AP     |
| d.      | Bill is that much tall                | NP is AP           |
| (20) a. | two=that many                         | QP=QP              |
| b.      | *just Bill and Pete=that many         | *NP=QP             |
| c.      | two friends=that many friends         | NP=NP              |
| d.      | just Bill and Peter=that many friends | NP=NP <sup>1</sup> |

Bresnan は、この構造によって同一消去のおこる条件を示している。たとえば、主文に  
*that much* という QP であった時、補文に、*six feet* という QP, *six feet tall* という  
AP 又は QP がある時は同一消去がおこるが *Bill* という NP と QP とは消去されず、  
消去した結果出て来る文は非文となる。しかし、(17d) のように、叙述文の場合は NP でも  
良いとしている。

以上部分的にはあるが Bresnan の提案を Hale と比較して述べた。Bresnan は Hale  
とは違い統語構造において比較構文の構造を示そうとしているが、規則によって統一的に比較  
構文を扱えるという点ですぐれていると言える。更に最上級を含む比較構文の構造の記述をす  
ることが今後の課題である。

1. Bresnan (1974), 328-29.

## 結 語

以上、比較構文の補文の内部の構造を概観し、その補文と主文との間に存在する関係を概観した。それによって比較構文とは、数量詞を含む名詞句・形容詞句・副詞句・動詞句等が、同様な数量詞を含む構造を持つ時消去が行なわれ生成される文であることが提案された。しかし、比較構文の構造は多様であり、更に細部の構造及び更に広い範囲の文の検討が必要である。

又この小論ではふれなかったが比較構文と否定の関係、<sup>1</sup> Ross, Lakoff の提議した non-source の問題も未解決のままである。<sup>2</sup>

又、比較構文には、no less than, no better than, had better 等、慣用句も多いがこのような用法と、この小論で扱った数量詞との関連も更に検討されなければならない。

以上のように、ここでここでふれたのは、比較構文の基本的概念のみであり、更に様々な問題点が解決することが今後の課題である。

### (参 考 文 献)

- Bresnan, Joan W. 1973. "Syntax of the Comparative Construction in English." *Linguistic Inquiry* 4, 275-343.
- . 1971. "On a non-source for comparatives." *Linguistic Inquiry* 2, 117-24.
- Cantrall, W. R. 1971. "Comparison and presupposition," *Linguistic Inquiry* 2, 573-4.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of syntax*. Cambridge, Mass: The MIT Press.
- Christie, W. Jr. 1972. "A non-source for comparatives." *Linguistic Inquiry* 3, 508-10.
- Curme, George O. 1931. *Syntax*. Boston: D. C. Heath and Company.
- Gnutzmann, C., R. Ilsen and J. Webster. 1973. "Comparative constructions in contemporary English." *English studies* 54, 417-38.
- Gnutzmann, C. 1975. "Some aspects of grading." *English Studies* 56, 421-33.
- Green, G. M. 1970. "More x than not x." *Linguistic Inquiry* 1, 126-7.
- Hale, Austin. 1970. "Conditions of English Comparative Clause Pairings." *Readings on English Transformational Grammar*, ed by Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum, 30-55. Waltham, Mass: Ginn and Co.
- Huddleston, R. 1967. "More on the English comparative." *Journal of Linguistics* 3, 91-102.
- Jespersen, Otto. 1954. *A Modern English Grammar* VII, London: George Allen and Unwin Ltd.

1. cf. Green (1970), Lakoff (1970) 等。

2. cf. Bresnan (1971), Christie (1972), R. Lakoff (1970), Ross (1970).

- Lees, Robert B. 1961. "Grammatical analysis of the English comparative construction." *Word* 17, 171-85. also reprinted in *Modern Studies in English*, ed by Reibel, D. A. and S. A. Schane. 1303-15. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall, Inc.
- Lakoff, George. 1970. "Comparatives and (n)ever." *Linguistic Inquiry* 1. 126.
- Lakoff, Robin. 1970. "Another non-source for comparatives." *Linguistic Inquiry* 1. 128-9.
- Pilch, H. 1965. "Comparative Constructions in English." *Language* 41. 37-58.
- Ross, Jonn R. 1970. "A non-source for comparatives." *Linguistic Inquiry* 1. 127-8.
- \_\_\_\_\_. 1970. "A note on implicit comparatives." *Linguistic Inquiry* 1. 363-6.
- Stanley, R. 1969. "The English comparative adjective construction." *Papers from the Fifth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*. 287-92.